



地球の木

■発行/地球の木理事会
 ■発行責任/横川芳江
 ■編集/広報部
 ■事務局/〒222-0033
 横浜市港北区新横浜2-8-4
 TEL 045-471-5536
 FAX 045-471-5543
 E-Mail:CZR10753@nifty.ne.jp

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- スタディーツアーは新たな旅のはじまり
- ネパールスタディーツアー2000 行動しはじめた仲間たち
- 青少年スタディーツアー（フィリピン）
- 北朝鮮訪問報告 春の訪れに、ほっと一息
- トピン税のゆくえ



スタディーツアーは 新たな旅のはじまり

副理事長 丸谷 士都子

身体と心でとらえる旅

「みんなすっごくいい顔してるー！」帰国後のミーティングに参加したスタッフがツアーメンバーの顔を見るなりこう言いました。たくさんの人とふれあい、たくさんしゃべり、たくさん考えた旅の中でそれぞれにどんな変化があったのでしょうか？

スタディーツアーは大きな衝撃を参加者に与えます。目に飛び込んでくる色彩、街に漂うにおい、ことばの匂き、食べ物、肌で感じる暑さ、涼しさ、湿度。全身で受けとめる体験は強烈です。さらに、現地の人との交流を通して心で受けとめたことは深い余韻を残し、次の行動へと人を駆り立てるエネルギーの源となります。

自分を見つめる

人と人とのふれあいこそがスタディーツアーの神髄だと私は思います。では、今年の参加者たちはそこから何を学びとったのでしょうか。「スタディーツアーは一種の摩擦。摩擦の中で変革は起こる」と17歳の高校生は語りました。「顔も服も住む家も違う様々な17歳と出会った。その中で、自分のことしかわかろうとしないみにくい自分が見えてきた」ネグロス島を訪れた大学生は、年代の異なる人たちが共に暮らす様子を見て、「自分がいかに狭い社会の中でしか生きていないか」ということを知ったと言います。「貧しい人に何かしてあげたいと思っていたが、ただ支援金や物を与えるのではなく、内からの変革を育むのが大切なのだ」と悟った社員がいます。



村でマジカルバナナのワークショップをする筆者

日本を見つめる

日本の暮らしに目を向ける人もいます。「物や情報が溢れ、自由に選べる豊かさを手にしたように見えるが、それは錯覚ではないか」調査で北朝鮮を訪れたメンバーは、歴史を知ることの大切さを心に刻みました。「ゼロから始める関係ではなく、マイナスから築き上げなくてはならない関係だと知った」

こうしてみると、それぞれが自分の日常を問い直し、歴史や豊かな社会を見つめ直していることがよくわかります。自分の姿が見えてくれば何を大切に、どのような行動に結びつけていけばよいかがつかめ、大きな自信につながります。

新たな旅立ち

スタディーツアーと調査のための現地訪問はますます地球の木の活動の大きな原動力となってきました。今春、地球の木はNPO（特定非営利活動法人）として新たなスタートを切りました。「地球上のすべての人々が自然と共存し、お互いの人権を尊重し、それぞれが自立したより新しい生き方を創造する社会の実現をめざして」という壮大な目標に一歩ずつ近づけるように、支援地から得たこと、日本に招聘したパートナーから学んだことを地域の活動につなげ、着実に賛同者を増やしていくことが今年の目標です。

今年度はあなたも自己変革のためのスタディーツアーにでかけてみませんか！

ネパール・スタディー・ツアー2000

行動しはじめた仲間たち

9日間を共に過ごした仲間たちから次々とEメールが届きます。小学校の先生をしている美奈子さんから、こんな便りが届きました。

E-mail E-mail E-mail E-mail E-mail E-mail

「学校図書にネパール関係のXXXXという本が入ることになったので読んでみて」と言われ、読みました。その本には(中略)『日本でお金を集め、ネパールに学校を作って、文房具と洋服を送り、先生にネパールの日給より高い報酬を払って…』と書いてありました。何か違うと思いました。私の気持ちを話して、図書室に並べるのをやめてもらいました。

E-mail E-mail E-mail E-mail E-mail E-mail

「教育の原点を探しに行こう!」という呼びかけに賛同した仲間たち。半数が先生、そして学生、主婦にエンジニア。個性豊かな10人の仲間たちは、ネパールで何を感じ、何を考え、そして、彼らの中で何が変わったのでしょうか。

ここにご紹介するのは、ネパール・スタディー・ツアーの感想文のほんの一部です。興味のある方は「ネパール・スタディー・ツアー2000 かけがえのない贈りもの」をお求め下さい。あなたもきっと行きたくなること請け合いです。

瞳が輝く時 — 中村 美奈子 (小学校教諭)

遠くから、軽やかな音楽が聞こえてくる。畑の間の石ころが転がる道を、20人ほどの子ども達が歩いてくる。今日、1~3年生はピクニック。音楽は、男の子が担いでいたラジカセから、田畑が広がる盆地の村に響いている。

ネパールの首都カトマンズからバスで7時間余り南に下ったチトワンという地域に、マディ村がある。木の柱に土壁、黒い瓦屋根の家々。牛やニワトリを飼い、田や畑を耕す暮らし。夜は満天の星、地には無数の蛍が舞う。私達は、太鼓と歌と踊り、そしてロクシー(酒)と心づくしのもてなしを受けた。宴の間、私のそばでにこにこしながら大人達の様子を見ていた男の子がいた。ガルシェ君、12歳、6年生。私の拙い英語にも一生懸命答えてくれた。宴が終わり、彼の案内で真っ暗な道を宮川さんと一緒に歩いて行くと、家の前で姉のアムリタさんがランプを灯して待っていてくれた。彼女について2階に上がる。ベッドが3つ。そのうち2つを日本から来た旅人のために空けて待っていてくれたのだ。アムリタさんが、遠慮がちに「ランプを消していいか。」ときく。そうだ、ランプの燃料も貴重なのだと気づき、あわててイエスと答え、眠りについた。

前日遅かったというのに、朝は6時前からみんな起きて働いていた。子ども達は掃除、お母さんは蚕の世話。顔を洗いに井戸へ行くと、ガルシェ君が桶を投げて水を汲んでくれた。隣が小学校のせい、少しずつ村の子ども達が集まってきた。外国人の私達に興味津々の様子。部屋に戻ると、アムリタさんが熱くて甘いミルクティーを持ってきてくれた。ネパールの朝はこのお茶が欠かせない。男の子が部屋をのぞいて変な声を出したかと思うと、逃げていった。いたずら好きなガ

ルシェ君の弟だ。身支度を終えた後、1階を見せてもらった。台所にはびかびかに磨かれた鍋と家族の数だけの皿が壁にかけてあった。1階の部屋にはベッドが2つ。ガルシェ君の兄が、はにかみながら自分の教科書を見せてくれた。昨夜は私達にベッドを貸したため、ここでガルシェ君達は寝たのだろう。アムリタさんが「写真を撮ってほしい。」とまた遠慮がちに言う。ピンクのストールをはずすと、透かし模様が入った小花柄の半袖ブラウスが現れた。朝、私達を起こさないようにと静かに取りに来たのは、このブラウスだったのだと思った。家の前でアムリタさんや子ども達と写真を撮り、それを送るために住所をノートに書いてもらった。英語はガルシェ君が一番得意らしく、彼がペンを取った。急に、わーっと子ども達が駆け出した。先生が自転車に乗ってやってきたのだ。「今日はピクニックだ。」とガルシェ君が教えてくれた。7時を過ぎたので、私達はお礼を言ってアムリタさんと別れ、ガルシェ君の案内でバスの方へ向かった。



生きたニワトリと大鍋を持ってピクニックへ行く子どもたち

バスの出発を待っている私達の方にピクニックに行く子ども達が近づいてくる。道いっぱい広がって歩いてくる。よく見ると、いろいろな物を持っている。ポリタンク、鍋、おたま、鎌…。生きたニワトリを持った子もいる。子ども達はランチの材料と道具を持っていたのだ!呼びとめて、鍋の中を見せてもらった。キャベツや穀物が入っていた。近くにいた人が「こんなにたくさんいるのに、ニワトリが2羽では足りないだろう。」ときいてくれた。答えは、「昨日、ごちそうしたから2羽しかいないんだ。」そう、私達のために大事なニワトリを料理してくれたのだった。どの子もピクニックが嬉しくてたまらないという様子だ。そして、心も足取りも流れる音楽のように弾ませて、1本道を歩いて行った。

ネパールの人々のつましい暮らしを見て、また、ネパールで過ごす中で、様々な事を考えた。生きていくために必要なものは何か。私はいらぬも



マディ村の少年と兄弟の契りを結んだ

ネパールの人々から学んだこと

村田 充 (大学生)

9日間のネパールスタディーツアーの中で、私たちは多くの人々と出会いました。今まで生きてきた環境とは全く異なる世界の中で、見るもの聞くもの体験するもの、一つ一つがとても有意義なものでした。人々の暖かい心遣いの中で、現地の日常の生活、考え、問題等、より現実的で深い部分の文化を感じることができました。

その中で僕が改めて考えさせられたこと。それは、「生き方の価値」です。最初にネパールの首都カトマンズに着き散策したとき、僕は正直、言葉ができませんでした。町の汚さ、整備されないままの道と建物、物乞いの子供たち…ただショックを隠せずにいました。しかし、ツアーが進み、人々の考え方や生き方を感じていく中で、そんな気持ちが消えていきました。僕は、自分を取り巻く環境と、ネパールでの環境を比べてものの価値を見ていました。しかし、よりネパールのことを知ろうとする中で、環境を比べるのではなく、いかにその環境にめげずに日々明るく生活していくか。という「生き方の価値」を知りました。

4日目の早朝、泊めていただいた村の家の窓から、外をじっと見ていました。僕よりももっともっと小さな子供がひとり、ジャガイモがいっぱい詰まった袋を引きずりながら、広大な畑を歩いていきました。ずっ

と遠くまで、ひたすら歩いていきました。言葉はできませんでした。でも、初日とは違う無言でした。もし、初日の思いで見えていたら、助けずに見ていた自分を責めていたかもしれません。でも、そのとき思ったこと。それは、同情の思いを持つのではなく、彼らは彼らで今の環境を一生懸命生きていく姿を見つめることが大切なのだ。ということでした。この子に「がんばれ」と心で思いながら、これからは、自分にも、もっと「がんばれ」って、いわなければいけない。自分の環境に甘えずに、自分がやれること、やらなければいけないことに、一生懸命取り組もう。そんな思いで、ずっと見つめていました。

日本は豊かでものや情報があふれ、自分から、何かがなく本当に手に入りたい、大切にしよう。という想いが薄れてしまいます。だからといって、決してネパールと同じ生活をするということではありません。

大切なのは、自分の環境をしっかり見つめ、自分はどう生きればいいのか、何がしたいのかを見つめ、そして周りの人々のよいところや大切さを見つめ、明るく生きていく。自分の環境に「生かされる」のではなく、自分がその環境で「生きる」こと。それが自立であり、自分らしく生きるということなのではないでしょうか。

●スタディーツアーのお知らせ

地球の木では2001年3月にフィリピンとネパールへのスタディーツアーを予定しています。

日程

3/25 夜マニラ着、 3/26 ネグロス・ツブラン農場訪問
 3/27、28、29 サンフリアン村にて農作業体験、ワークショップ、演劇発表
 3/30 ツブラン農場 夜マニラへ、 3/31 午後成田着

ツアーで得たこと、私がこれからすべきこと

平岡 聖子 (20才 学生)

彼らと過ごした日々は、本当に楽しいものであった。見るもの聞くもの全てが新鮮で、1日を心地よい疲れで終えることができた。特にワークショップについては、得るものが大きかった。表現をする楽しさ、それを通じて連帯感と友情を深められた。最後には、私達の劇を作り上げることができた。このことは、私に充足感と自信をもたらしてくれた。自分がひとつ成長したような気がした。しかし、残念に思うこともある。それは、彼らの農業で生活を支えている実態やその背景にある歴史、社会の状況をよく理解していなかったことだ。私の勉強不足が原因である。そのために、私は彼らに対して何ができるのかと考えた時、わからなかった。今回のツアーで私が反省すべきことである。

貧しいということは、彼らの生活や話の中からほんの少し垣間見ただけである。貧しさを感じる以上に彼らの心の温かさを私は感じた。そして子供からお年寄りまで助け合っているその姿は、私達が忘れてしまったものではないかと思った。物が溢れていて食べる物に困らない状況にある私達が、心から笑って幸せと思うことが少ないのはなぜだろうか。

私は自分の専門分野の福祉を学びつつ、貧困や人々にとっての福祉=幸せのあり方を考えたい。そして私達ができることを次回のツアーに生かしていきたいと思うのである。

サンフリアン村での手遊び

大貫 駒 (21才 幼稚園教諭)

アジアの布や竹細工って、何てステキ!と思いついたのが小学生の時。小6の文集には「青年海外協力隊に行きたい」と書くほど、アジアへの関心は高まっていた。「とりあえずどこでもいいから行って、見近に感じてみたい。」というのが口癖になっていた頃、「地球の木」の会員であった母から教えられ、会報に出ていた第1回ネグロス青少年スタディーツアーに応募した。それが高校1年の時。もう1度行ったのは短大1年の時。そして今度は一応スタッフという責任と共に第3回目に参加させて頂いた。

昨年、短大を卒業したばかりの私が、簡単に「先生」と呼ばれる職に就いているものなのか、と疑問に感じながらも、現場で1年やってきて、いつも考えるのはネグロスのことだった。おもちゃも何もなければ、生身の自分しかない。そんな時、自分はどこまで何ができるのか?それが本当の力だと思っている。日本とフィリピンの環境の違いは大きい。自分の中にある保育のあり方を具体化したくて、今回の参加を希望した。

ネグロスでは、現在PAP21のプロジェクトでもある幼児ラーニングセンターの様子をたまたまサンフリアン村で見ることができ、手遊び(歌を歌いながら手を色々動かす遊び)をやらせてもらい、とても貴重な体験をした。今後も、何らかの形で関わって行けたらなあと思う。

注 PAP21...21世紀に向けた民衆農業創造計画

ネグロスで考えさせられたこと

中村 尚暁 (19才 学生)

「どうしてネグロスへ向かうの?」「どうしてフィリピンなの?」出発前、何人もの人にそんなことを聞かれた。でもうまく答えられない自分がそこにはいて、「何かがあるから」としか説明できない自分もいた。

しかし、ネグロスでの4日間はあっという間に過ぎて行く。そんな中ワークショップやサンフリアンでの生活を通して大きく2つの事を僕は考えさせられていた。自分は1つのコミュニティの中で、どう役割を受け、どうしてゆくべきなのか。そして人としてどう生きてゆけばよいのかということだ。

ネグロスでは家族と家族がそれぞれに持ちつ持たれつの関係であり、それが根源となって地域コミュニティや経済を支えているように見受けられた。では、僕らのコミュニティは?日本の社会は?というところだろうか。複雑に利害がからみ合い友達とさえ、両親とさえその関係は希薄となりつつある。もちろんネグロス社会にだって問題がないわけではない。しかし、人が人として、人間として生活してゆく上で何が本当に必要なのか、何が幸せなのかをネグロスは僕に教えてくれたように感じる。

あの時、あの時間、僕はたくさんを感じ、たくさんを学んだ。その何かの多くはうまく説明できない。ただその「何か」が少しずつ僕を変えつつある。

未知への一步

飯田 悟 (21才 学生)

「いまわれらはフランス国の首府にあってこの国の言葉を解しないのは一見不幸に似ているが、しかし、枝葉にすぎぬ。われらは、活眼さえあればこの国の文明を見ることができ、その文明を作っている法を察することができる。」
 -司馬遼太郎「とぶが如く」より抜粋-

明治時代、日本の視察団がフランスへ司法、警察などを視察に行ったときに、雇った通訳が実はフランス語ができなかった。この言葉はうろたえる一行を鼓舞するため、リーダー格の男が言った言葉である。

私にとって、言葉、常識などが、ほぼ通じないフィリピンに行くというのは、不安が多いものであった。また、そんな状況で何がわかるのだろうかということも思っていたのだが、不意にこの言葉を思い出した。彼の言葉は確かに、勇気や希望を与えてくれたが、それ以上に、彼らに対して敗北感に似た何かを感じざるを得なかった。そこで、この旅に参加し、何かをつかんでこようと思った。

フィリピンでは、見るものすべてが新鮮であり、発展途上とは何か、また南北問題とは何かなど、自分の知りたかったテーマについて触れることができた。自分では満足するに充分すぎるほどのものを得た。これからは、それらをどのように活かすことができるか、というのが今の自分の課題であろう。

未来へ

高梨 仁子 (20才 学生)

ネグロス島のサンフリアンでとても暑い太陽の下、子供たちが無邪気に遊ぶ姿と椰子の高い木に登っている青年を見ていて、まるで夢のような生活だと思った。自然の美しさの中、穏やかな時間と心の豊かさが存在していた。その中で、人間らしく自分らしく生きるという事を体験させてもらった。サンフリアンの生活はシンプルなものだった。みんなが助け合って生きていた。池を力を合わせて作りあげ、養殖魚(ティラピア)を育て、近くには見張り役の家があり、見張ることのお礼にみんなで食べる卵を半分渡すという事が成り立っていた。ツブラン農場では、自然循環農業を見せてもらった。養豚、市場の生ゴミから作る堆肥、BMWの導入。BMWプラントはまだ生物活性水にかえるまでには至っていなかった。でも彼等はこれから先の農業を試行錯誤しながらも、とても良いものにしていくと思う。数年前までは手にできなかった土地を、自分たちで勝ち取ったのだから。

フィリピンの青少年は、とても真剣に農業を考え、自分たちで良い方向へ変えていこうという姿勢、沢山のことを学びたいという強い意志があった。きっと、自然と人間の共存できるステキな未来が広がるはずだ。

ネグロスから帰国し普通の生活に戻った今も、ネグロスの人々を思うと元気が出る。彼らの笑顔が鮮やかに蘇り、きっと頑張っているだろうと思うからだ。

注 BMW...バクテリアミネラルウォーターの略



演劇ワークショップ 日本の家庭の場面



サンフリアン村草取りの援農

春の訪れに ほっと一息



黄海北道銀波(ウンバ)郡の子どもたち 先生のアコーディオンとおどりで歓迎してくれた

今回も、北朝鮮子どもキャンペーン「子どもたちに愛を届けよう! '99」にご協力いただきありがとうございました。'96年より続いているキャンペーンは今年で4回目となりましたが、地球の木の方々からは34万4,597円の募金が集まりました。これをキャンペーン全体の募金と合わせ、3月末に子どもキャンペーンの代表チームが北朝鮮を訪問し、現地の子どもたちにお米(16トン)50万円分を送った他、粉ミルクや文房具、医薬備品、お菓子などを持参することができました。この他、WFP(国連世界食糧計画)を通じて、子どもたちに栄養食(大豆ブレンドミルクなど)100万円分を支援することになっています。

ピョンヤン市育児院にミルクを届ける 現地では粉ミルク、離乳食が不足している。(日本のミルクは特に体に合っているとのこと)



食糧事情と子どもたちの状況

黄海北道ウンバ郡(洪水の被災地)の幼稚園、託児所を訪問して、国際社会からの援助によるおやつや給食などで、子どもたちが元気を取り戻しているとお話を聞くことができました。この地区の食糧供給所も訪れましたが、アメリカ、EUからの支援食糧があるのみでした。これらの食糧は優先的に子どもたちの施設や病院などに振り分けられ、普通の大人たちまではまわらないということです。WFPからはトウモロコシ、豆、麦、栄養食などが送られてきたそうですが、管理委員会の人は、子どもたちには消化しにくいものもあり、やはり米を食べさせたいと言っていました。この地区へは50万円分(16トン)の米を支援しました。私たちが粉ミルクやお菓子を届けたピョンヤン市内の育児院では、栄養状態の悪さからか、目と皮膚に疾患のある子どもが多く見られました。

WFPのデービッドモートン氏は、「国際社会の支援により食糧事情は全体的に良くなってきているが、今の支援プロジェクトの在庫は6月には底をつくので、日本政府からの支援はその繋ぎとなるだろう」と話していました。水害対策委員会の李 戴林さんの話では、「現在の配給量は、4月までは1日200g、5月からは1日150gに減り、このままでは6月23日以降は配給が停止する」ということでした。

深刻なエネルギー不足

マイナス10度以下の寒さの中、比較的恵まれていると言われるピョンヤン市内でさえ、学校や病院でも暖房がなかったという話に象徴されるように、食糧不足と並んで、今、エネルギー問題はかなり深刻です。電力不足のため、水道もあまり機能していないようで、バケツで水を運び、薪を集める人たちの姿を多く見かけました。これに従事しているのは主に女性で、基本的な生活を維持するだけでも相当な負担を強いられるようです。

子どもたちとの絵を通じた交流

前回、前々回の訪朝時に訪れたルンラ人民学校では、子どもたちが暖かく迎えてくれました。校長先生は、子どもたちの才能を日本で紹介してくれたことをとても喜んでくださいました。子どもたちは、絵を描いた歌や楽器の演奏を聞かせてくれ、私たちも最後には踊りの輪に誘われて一緒に踊ってきました。今回もたくさんの絵を頂いてきましたが、日本からも横浜のガールスカウトの女の子たちが描いた絵を送り、「いつかは出会う」子どもたちの絵を通じた交流を進めています。



ピョンヤン市育児院 母親がいない子や親が病気で育てられない子を養育している。



育児院の子どもたち

子どもキャンペーンから…

'96年、'97年の最悪の時期と比べると、人々の表情は明るくなってきており、自力で何とか食糧を調達する術を身につけてきているようです。配給はここ数年と同じく、1日200g程度で年を越し、春で終わりとなっていて、この量は国連の定める1日最低必要量の458gには遠く及びません。どこの施設でも国連やNGOなど海外からの支援によって何とか子どもたちの栄養状態が保持されているという話でした。食糧の確保のためには農業の回復が早急な課題ですが、エネルギー問題をはじめとして経済やインフラの回復が進まなければ、問題は容易に解決しないでしょう。確かなのは、もし現在の支援が滞れば、子どもたちや社会的弱者への影響は必至であるということです。子どもキャンペーンも含めたNGOや国連(WFPやユニセフなど)の果たす役割は大変大きいと思いました。

北朝鮮の人々、特に病院や学校や子どもの施設などで現場で働く人々は本当に一生懸命頑張っており、何とかこの苦難を乗り切ろうとしています。グループで援農や、復旧工事をする姿があちこちで見られました。高麗航空のスチュワーデスやピョンヤンのレストランの給仕係の若い女性たちの手が、農作業を手伝っているせいか、とてもがっちりとしていたのが印象的で、国を支えるこの人たちの誇りがひしひしと伝わってきました。

子どもキャンペーンではこれからも、子どもの施設への支援物資を持参する他、WFPの栄養食プランへの参加など、未来の東アジアを共に作っていく子どもたちへの人道援助を続けていきます。日朝の重い歴史(36年間の植民地支配、現在も国交がない状態、差別や偏見など)を充分踏まえ、誠意ある人道援助を続けながら新しい市民同志の友好関係を作っていくことが、今、必要なのではないのでしょうか。

連続講座 料理を通してアジアを学ぶ 地球の木/ VISION共催

- 内容 朝鮮料理(チジミ、ナムル、オイキムチ他)
- 受講料 3,000円(単発参加)
- 日時 7月1日(土) 午後1時30分~4時30分
- 申込み VISION事務所
- 場所 オルタ館4階料理教室
- TEL/FAX045-472-7093



トビン税のゆくえ

トビン税は世界の貧困を根絶するか？

前号でJubilee2000の動きをお伝えしましたが、これは地球上から貧困を無くすという国際的な行動の一つです。そしてその貧困を生み出すと考えられる「富の規制」をする方法として、世界の国や学者、NGOに注目され取り組み始められた「トビン税」について報告します。

トビン税とは、1970年代ニクソン・ショックで各国通貨が流出し、さらに石油ショックによって産油国の石油ドルが欧米の銀行に預けられ、国際的に通貨投機が始まった時に、1978年ノーベル経済学賞を受賞したJames Tobinn博士によって提唱されたものだった。投機的な為替取引に、0.5%より少ない国際税を課税するという提案で、国際取引という巨大な『敵の前に砂を撒いて、進行を遅らせる』という表現であった。

しかしトビンの提案は、先進国の政府、国際金融界も日本政府も反対で『課税するのも、それを配分するのも、政府の権限であり、トビン税のような国際税には反対だ』（1994年社会発展NGOフォーラムとして政府各省庁との対話においての大蔵省国債金融局長の返答）とのことだった。

その後、国連の中でトビン税が討議されたが、先進国の政府代表によって反対され、しかもアメリカはトビン税について、国連の文書に掲載する事すら反対した。

そんな訳でトビン税の議論は、国際的に下火になった。しかし、1997年7月タイに始まった一連の通貨金融危

機において、価格の変動を大きくした要因の一つヘッジ・ファンド【hedge fund】があると言われている。ヘッジ・ファンドは少数の大口投資家からのみ資金を集め、巨額の売買を行なって大きな投資収益を狙うのである。大銀行（シティ・バンク、ドイツ・バンク、チェイスマンハッタンetc）もまた同じである。

この事からトビン税についての議論が、再び起こった。世界各国でトビン税に取り組む組織が現われ、アメリカではTobin Tax Initiative USAが発足し、フランスでは（ATTAC）が、イギリスでは（War on Want）等のNGO。カナダとフィンランドの国会はトビン税の導入を決議したが、両国とも銀行業界の圧力を受けた大蔵省の抵抗によって実施に至っていない。EU議会はトビン税を『魅力的なオルタナティブ』と結論づけた。日本の連合は『為替取引への国際税の導入』を提唱した。

ちなみに、0.1%のトビン税では、年間2000~3000億ドルの収入が見込まれる。この額は年間のODAの4倍以上にのぼるといふ。これは直接投資のような非投機的な為替取引に大きな影響を与えるものではないが、瞬時に刻々行なわれている投機目的の為替取引にとって大きなダメージになり、熱を冷ませるであろう。

トビン税から得られる新しい資金は、世界の貧困根絶、エイズ対策、地球温暖化などグローバルな緊急課題に充てられるであろうとの事である。

INFORMATION

●寄付をいただいた方々 ありがとうございます

木村三千代様	大和市	三枝木美恵様	横浜市
武志富美枝様	大和市	前川昌代様	東京都
清水由紀江様	横浜市	後藤淳子様	川崎市
田島様	横浜市	鈴木真知子様	横浜市
西本和美様	相模原市	まあじょうむ様	横浜市
野庭工房様	横浜市	長瀬功様	横浜市
泉谷有志グループの皆様 横浜市			
寒川町大曲子ども会の皆様 寒川町			
県立北陵高校生徒会・JRC部の皆様 茅ヶ崎市			

ネパール講座

ネパールのくらしとNGO活動

講師 定松栄一

(シャプラニール前ネパール駐在員)

日時 6月24日(土) 午後2時~4時

場所 オルタ館201会議室

問合せ 地球の木事務局

●会員募集中!

お問い合わせは事務局まで045-471-5536

地球の木 とは

地球上のすべての人々が自然と共存し、人が人らしくあたりまえに生きていくことができるように、地域と地域を結ぶ国際協力活動を行い、相互理解を深める社会教育活動を通して、お互いの人権を尊重し、それぞれが自立した生き方を創造することを目的としています。